

植物のような心で

マルエージング鋼

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ISの世界に吉良吉影みたいなオリ主を入れてみたら……

7 6 5 4 3 2 1

--	--	--	--	--	--	--

46 39 31 23 15 8 1

目次

2022年2月10日

ちようどこの時期は受験する生徒たちがこぞって試験会場へと出向いていく日である。しかし受験に関係無い者達は各々の用事を何の変化もなく過ごしていることだろう。どこの国も同じような状態では無いだろうが、少なくとも日本に住まう人々は大抵このような感じだろう。そんな日本国内の東京都内のファミリレストランでの一幕。

二人の女性客がそのファミリレストランに入店する。どこか横柄とした態度で我が物顔で入店した。一人の女性店員が接客に応じる。

「いらっしやいませ。何名様でしょうか？」

「二人に決まってるでしょ、見て分からないワケ？」

「す、すいません。二名様ですね、お席にご案内します。」

「ああ、それは良いわ。もう席決まってるし。」

そう言うと二人の女性客はドリンクバー近く、そして店の出入り口に近い席へと向かっていく。だがその席は生憎男子学生三人が座っていて空いていない。だがその女性客はテーブルに置かれた料理を、その男子学生達にぶっかけたッ！苦しそうな男子学生達に威圧的な態度を取って言い放つ。

「ここは私たちの席よ、男の分際で何勝手に堂々と座ってるのよお？」
「そうよそうよ！男なら地面にへばりついて犬食いしてなさいよ！」

この二人は典型的な女尊男卑主義者であったのだ！その理由は、『篠ノ之 束』の発明した「インフィニット・ストラトス」によるものである。なぜかというところ、この兵器は女性にしか扱えないからである！どの様な原理かは知らないが、この事実によって男の地位が廃れ、

女がこの世を征していると思ひ込んでいるのだ。世間的にも、社会的にも。

その男子学生三人の内一人はその女性客二人を睨み付け、今にも襲いかかりそうな勢いだ。その視線に気づいた一人が、その男子高校生に嘲笑するかのような笑みを浮かべながら言い放つ。

「なあにい、その態度？ 私達に逆らうワケ？ もしそうだとしたら……アンタの人生終わっちゃうわよ〜?!」

「ツ……このっ！」

「待て待て、下手に刺激すんなって！」

このようなことがありふれてしまった時代へと変わっていったのだ。たった1つの兵器によって、世界の常識でさえも変わってしまったのだ。

そこに一人の男性従業員が入り込み、男子学生達を誘導するとその女性客に向かい合った。

「お時間を取らせてしまい、誠に申し訳ありません。今回お代の方は結構ですので、好きな料理を召し上がり下さいませ。」

「へえ……気が利くじゃない。お言葉に甘えさせてもらおうとするわ。」

今や男の地位というのは底辺になった。それゆえに狡賢い者は上手く女尊男卑の風潮を利用しつつ生き延びることに成功する人物も居た。そしてこの男もまた……男は先にテーブルや椅子などをアルコールで湿らせた綺麗な雑巾で拭き、丁寧に素早く磨いたあとで女性客二人を座らせた。

「中々早いじゃない。それに良い出来。」

「恐縮です。ご注文は後程で宜しいでしょうか？」

「……いいえ、そうねえ。チキンステーキのAセットを注文するわ。」

ドリンクバーは……貴方が注いで。」

「畏まりました。そちらのお客様は。」

「あたしは……海老と牡蠣のスープスパゲティ。勿論あたしも同じく。」

「かしこまりました。では、お飲み物を決めていただけますか？」

「紅茶二つよ」

そう言つて席から離れていく男。その後ろ姿を見て女性客二人はニヤニヤと気持ちの悪い笑みを浮かべていた。男はそのような笑みが見えていないのだが、容易に女性客の表情を想像出来るだろう。

だがこれは一体どういうことか。苦悶の表情を一つも見せていない男は、淡々と自分に与えられた仕事をこなしていく。まるで、よくデパートに案内役として設置されているアンドロイドの様にツ！何も気にしていない様な無表情さのダツ！

男は紅茶二つを適切な温度、適切な抽出時間で紅茶を作り女性客に差し出した。

「お待たせしました、紅茶です。」

淡々と男は自分の仕事をしている。故に無表情だ、能面の様に。男のその表情に、自分達の表情を曇らせた。

(何よコイツ……今まで散々男を貶めたのに、コイツだけ全く違う対応をするし。ムカつくわねえ……。)

その時注文するためのベルが鳴る。押したのは恐らく齡5もいない少女だろうと推測した男は、女性客二人に礼をして接客に応じようとした。

だが向かおうとした途端、女性客の足が急に通路から出て男の足と接触してしまう！ それによって男は体勢を崩してしまうも、もう片方の足を即座に前へと出して体勢を整えた。そのことに女性客は

舌打ちをした、少なくとも男にも聞こえるぐらいに。

「……失礼、何分平衡感覚が鈍いものでして。以後、気を付けます。」

それだけ言い終わると、そのまま何事も無かったかのように接客業に応じる。与えられた仕事をこなし、何事も無く通常通りの業務を続ける男に対して女性客二人は苛立ちを隠せないでいた。

「……………もう良い、帰らせてもらうわ。行くわよ。」

「はー。」

女性客二人は注文したものを無視し、そのままファミリールレストラ
ンから出ていく。その様子は全員の目にキチンと映っているものの、
二人は周囲の客を威圧すると、再度舌打ちをして帰って行った。

勿論男もその様子を見ていた。しかしその目は何処か冷ややかな
ものであった。

その翌日、先程の女性客二人が交通事故で死亡したニュースが流れ
たが、それは別の話し。



時刻は午前7時頃となったころ、とあるアパートの1室で目を覚ま
す男が居た。先日女性客に接客対応をしていた男の部屋であった。
内装は質素なものとなっており、無駄なものがない。面白味のない部
屋、と言ってしまうえばそれまでだ。

私の名は『霧島きりしま 影吉かげよし』どこにでも居る普通の一般人だ。自立し
て実に2年が経過し、18になった私は普段ファミリールレストランの
アルバイトをしている。接客態度は良く、訪れるお客様からは好意的
な反応を示してくれる。

18といえば受験や就職活動をする時期でもあるだろうが、今のところあのファミリーレストランを続けようかと思っている。決まった時間に決まった成果、決まった仕事をこなしていけば良いだけだからな。

18なので酒は飲まないし煙草は吸わない。大体緑茶を飲んで落ち着いていたり、適度な運動をして欲求不満を解消している。朝は6時30分に起きて朝食を作り、キッチンと7時には朝食の時間となる。学校には余裕が出来るように間に合わせ、何の問題も起こさないようにしている。

テストでも学年3位に入るぐらいの知力はある。もっと勉強すれば1位も取れるかもしれないが、そんなのは真つ平御免だ。私の平穏な生活が崩れてしまうでは無いか。チャホヤされるのも苦手だし有象無象がハエみたいに寄って集って来るのは嫌だ。

ましてや注目されることにとつてもないストレスを感じるのに、態々自らストレスに晒されるようなことをするのは愚行にも程がある。

『続いてのニュースです。昨日午後11時頃、二人の女性が車に跳ねられ死亡しました。死亡したのは――』

朝食はニュースを見ながら摂るタイプだ。朝に情報を取得することで覚えやすくなる。夜はダメだ、夕食後に勉強し、風呂に入りストレッチをして床に就く。寝る際に適温にさせたホットミルクを飲んで眠ると朝までぐつすりだ。

今流れているニュースに出た女性というのは、私が接客したあの女尊男卑クズ思考の人間のことだろう。だが私には関係ない、何故なら当事者では無いからだ。被害者でも無ければ加害者でもなく傍観者でもない。全く無関係の人間だ。

表面上ではな。実際あの女どもを殺したのは私ではあるが直接的な原因ではない。この場合直接殺したのはその車を運転していた加害者であって私が関与しているなんて一切思いつかないだろうな。

紅茶を差し出した際に女どもの恐怖の感情を殺しておいて良かった。扁桃体に刺せば出来ないことも無いのだからなあ。

こうして私は平穏な日々を得ている。誰にも邪魔されずストレスフリーな生活を

『つ、続いて速報です！ 世界初の男性操縦者が現れました！』

なにイイイイイイイイ？

そして翌々日

今日は悪い夢を見たかのように気分が優れない、とてもだ。態々他にも男性操縦者を探す為だけにこちらの生活リズムを崩されるとは……！ いっその事関与している人物全員消すことも吝かやぶではないにせよ、やはり目立ちたくない思いが勝ってしまう。

くそッ、恨むぞ初の男性操縦者め……。もし私の近くにいた場合は即刻私の「マールダース・ハイ」でなぶり殺してくれるッ。

「次、早く来なさい。」

私の番か、しかしこんなことをして何の意味があると言うんだ。ネットニュースでは『織斑一夏』がISを動かしたとあるが、どう見ても何かしら作弄的なものを感じられる。検索してみれば『織斑千冬』の弟だというじゃあないか。

織斑千冬のこと調べた程度だが、ISの世界大会「モンド・グロツソ」で優勝経験のある人物だ。そして忌まわしきISを作り上げた『篠ノ之束』と交流があるというではないか。こうなつてくると、織斑一夏は篠ノ之束によって人為的に選ばれた可能性だつてあるのだぞ。勘の良い奴らならばそう考える、私だつて考えるぞ。

なのにこのような行動を強制しているという事態だ、巫山戯ているんじゃないのかコイツら。

目の前に忌まわしき機械が鎮座している。ここまで来てしまったことに嫌悪感と同時にこの機械を殺してやりたいと思う私が居るが、今ここで事を起こせば私が疑われてしまう。どうせ私には反応しないのだから、適当に触ってさっさと帰ろう。そろそろ正社員になれるチャンスが近付いているんだ、邪魔をするんじゃないぞ？

——どうしてこうなった……ッ!?

私、霧島影吉の心境を一言で表すのであればこれしかないだろう。今私は理由あってモノレールに乗車している。指定された時間、指定された場所に間に合うように荷物を纏めて家を出た。本当に急だった。

何故私がISを起動させてしまったのだッ!?!　そして内心ふざけるんじゃないと毒づいていたが、公の場で暴れ回るようなことは断じてしていないッ!　だが怒りの有頂点に達した私は、去り際にそのISを殺した。簡単だったよ、ISコアを見つければマードーズ・ハイによって容易に始末できるのでだからなあ!

だが私が離れた途端にISが機能停止に陥ったことで、1つ混乱が起きたのは言うまでもない。必然的に私は注目されてしまった……コラテラルダメージとは言えども、私の心身疲労が溜まる一方なのに変わりはない。政府の人間に軟禁状態にされている間は、ずっと勉強していたよ。

特に数学は趣味と兼用して延々と問題を解いていたよ。たった一つの答えを探すために幾年もの間、先人達が技術を集結させてきた数学にはとても感謝しているんだ。答えまでの過程の数式を、ずっと眺めていれば欲求が解消されるのだから。

荷物は予め政府の人間に紙に書いていたものを取りに行かせたよ。質素な内装だ、別に何か変とかそんなものは微塵も感じてなさそうだったよ。

……おっと、そろそろ着く頃か。寮生活を予想して荷物を持っていく羽目になるが、まあ教職員に預けていれば大丈夫だろう。私は寮の場所も使用する部屋も知らんのだから。



IS学園の正門前で待ち構えているようにして立っている者が居た。彼女はこのIS学園で1年の主任を担当し、経歴にはモンド・グロツソの優勝という輝かしい成績を持つ『織斑千冬』である。この日に威厳とした態度で待っているのは、弟以外に見つかった男性操縦者を迎えるためである。が、彼女の思考は霧島影吉のプロフィールや経歴……ではなく彼の身の回りで起こった出来事について思考を巡らせていた。

霧島影吉 18歳。今年の8月に19になる、元は高校3年の男子であった。一人暮らしでバイトをしながら学校生活を送っていたが、今回の適性検査で見つかった2人目。しかしその適性検査後に彼がISから離れた途端、機体の全機能が停止し動かなくなった。

政府は当初、この出来事は霧島影吉が起こしたことだと思っていたが、そんなことが出来るような人物ではなかった。淡々とバイトや勉強をこなし代わり映えない生活をしていた彼を見て、政府は即刻霧島影吉の調査を止めた。

しかし織斑千冬だけが、彼に対する違和感のようなものを感じ取っていた。そして調べていくにつれてほんの少しだけ理解したことがあった。彼の周囲では、死人が出ていることを。厄病神、という訳では無いのは織斑千冬も分かる。そこまで頭が働かないわけではない。

彼女はこの死人がどうにも引かかった。事故死、というのが殆どの結末であった。故にその事故死に、喉奥が塞がれるような不可解な気分を味わった。

接点にしては金箔のように薄く、しかし無いとまでは限らないものに、もどかしさも感じていたのだ。

そんな思考も束の間、モノレールが織斑千冬の視界に入った。今は気持ちを切り替えて生徒を出迎えるということに意識を向けた。

霧島影吉という人間と初めて対面した時、人間なのだと思った。

それと同時に、人間なのかと思ってもいた。機械的に淡々と何かを熟す傍ら、感情の起伏が少ないとはいえ笑みを浮かべたりする奴が、とにかく不気味に思えてたまらなかった。

モノレールから降りてきたそいつは、また普通では考えられないくらい無表情を貫いていた。IS学園に連れてこられ、半ば……いや違う。ほぼ腫れ物のように扱われたりして夢や進路を潰されたのにも関わらず、コイツは妙に達観していた。それが気になった。

だが今は勤務時間内、下手に何か探ろうものならば不味いことに成りかねない。そもそも政府の者も女権団体の1件でピリピリとしているせいで、対応を慎重にしなければならぬというのに。

「君が、霧島影吉だな。2人目の男性操縦者の。」

「……ええ、そのようです。」

「……教室に案内する、ついてきてくれ。」
「分かりました。」

……まるで他人事みたいだな、この様子じゃあISを嫌っている節があるみたいだ。しかし、表情が本当に分からない。能面でも被って生活しているんじゃないのか?……いかん、少し素が出てしまった。

まあ、コイツは私の担当するクラスではないというのが気掛かりではあるが。一纏めにしておけば確かに監視として楽ではあるが……はっ! これはもしや、神が私の負担を減らしてくれているのかッ!? ……やめよう、そんなキャラじゃないだろう私は。だが一夏の監視、もとい面倒と対応でいっぱいになる。ほかの教職員にも政府からの監視命令が来ているので、役割分担ということが出来て一安心している。

コイツは3組に所属することが決定されている。しかし……その3組の担任が癖のある奴で、そのせいで私でさえも手を妬いている人物だ。今も私が案内するのではなく、そいつが案内する予定だったのにも関わらずだ。

「ここが、君が通うクラスだ。」

「分かりました、ありがとうございます。」

まだ無表情を貫いている。コイツが表情を出すのか、少し心配になつてきたな。しかしそれよりも……そろそろ行かねばまずいか。足は1組へと向かうが、私の心は疲弊していた。



3組のクラスに入る。現状それしかすることが無い上に、登校初日からボイコットするのは私の道理に反する。なぜ入学式に呼ばれなかったのかは不思議でたまらなかったが、過ぎたこと及ばざるが如し。特に気にすることでもないだろう。

やはりというか、目立つ。だがこれも一過性のものと捉えれば……む？ なぜ担任教師が居ない。職務怠慢じゃあないのか、これは。しかし他の女子生徒が席に座っている中、1つだけ空席が……。その空席まで向かい、椅子に手をかけようとして――

「おおう、来たぜー。」

柄の悪い奴が入ってきた。にしても……この席はあの女子生徒のものなのかッ!?

「おうい、そこの新入生。何か変なこと考えてなかったんじゃあねえのかい?」

こ、コイツっ！チョークだ！チョークを投げてきやがった！私に向かって、新品同様であろうチョークを投げてきやがった！……………っ

？いや、これは……投げて壁に当たっただけでこうなるのか？

このチヨークのバラつき具合、あんな奴が出せる威力じゃあない！見た限り、そこまで力を物体に乗せられる奴では無いはずだ！だがこれはっ、とても強力な力で投げられ当たった場合のみに起こるようなものだ！

ならば……これは一体？！

「おういそこ、男子。早く座ってくれえい。自己紹介が遅れるだろう。」

っ……確かに、今はこのチヨークの謎に構っていられない。これでは1つ悪目立ちをするだけではないか。落ち着け、霧島影吉。あのチヨークの謎については、まだ考える時間はある。今は癩だが、アイツに従っておこう。

「おうし座ったな。んじゃあ……おつす、オラ悟○」

『……………』

「んだよ、ノリ悪いなあ。『桂城かつらぎえんり円莉』、永遠の18だよっ。きやびっ！」

……………何なんだコイツは。テンションの起伏が激しいのか、それとも単なる変人なのか。とにかくコイツにはあまり関わりを持たない方が良さだろう。

「あ、3組の担任するからなー。はい自己紹介。」

……………こ、コイツは、本当に関わらない方が良さかもしれん。だが担任ということをついでのように発言する輩だ。本当に唐突に、万に一つの可能性として必ず関わってくるかもしれん。そうならないように、色々と避けなければ。

「んじやあつぎー、霧島あ。」

「はい。」

「堅いなあ、もう少しラリろうぜ。」

「……霧島影吉、18歳。趣味は数学の問題に触れることだ。以上。」
「変な趣味だなおい。」

貴様のような変人に言われたくないっ！くそっ……だんだんフラストレーションが溜まり始めてきた。ヤバい、そろそろ限界が近い。早く問題が解きたくなってくるじやあないか！ええ!?

「んおーし、もう自己紹介終わったな。うん。ああ、霧島あ。」

「……はい。」

「放課後に化学準備室に来おーい。おら、こんな美少女から告白されたぞ。」

「……………はい?」

「そんじや、あとはテキストに授業やるからなー。1時間目までゆーつくりと過ごせー、以上。」

……本当に帰って行つたぞ、アイツ。というより掴みどころが無すぎて、何処をどう突っ込んでいいのか分からなくなってくるんだが。しかも化学準備室に來いと……馬鹿なのかアイツは。私がこの校内のことを既に知っている訳じやあないんだが。こればかりは無視しても良いだろうが、下手に無視しても不味い。しかし行つたとしても目立ってしまう……チツ、行つた方がまだマシか。

「ああ……ちよつと、良いかな?霧谷きりがやさん……だったかな。」

「え、な、なんですか?」

「化学準備室の場所が知りたくてね、教えてもらつても良いかな?」

「あ、はい。分かりました。」

「すまないね、助かるよ。」

暫くは変な噂が立つが、仕方あるまい。何か助け舟が出るまで待つてみるのもありだが……織斑千冬に伝えるか。そちらの方が手っ取り早いが、さてどうしたものか。

「なに、桂城先生が？」

「ええ。……何故私を指名したかは知りませんが、迷惑と感じているので注意をしてもらいたく。」

「……………ハア、分かった。だがあまり期待しないでくれるか？ お前も見た通り、あの性格で我々教師陣でも手を妬いてしまっているの
でな。」

「……………分かりました。」

職員室へ向かっている途中、廊下で霧島と再開した。そして聞いてもらいたいことがあると言い、先程の桂城の言動を聞いて頭を抱えた。そして霧島は私に頼ってきた、桂城の言動に対し注意を促してくれと。……………それが出来るのなら苦勞はしないのだがな、本当。隣で聞いていた山田君も苦笑の声を出しており、霧島に同情しているかのような雰囲気だった。

にしても、やはりというか。コイツはいつまで表情を崩さないつもりなんだ？ その顔は能面で、実はその下には素顔でも隠されているのかと思ってしまうではないか。いやそんな馬鹿なことがある訳ないのだが、本当にそうなのでは？ と思わせるぐらいの無表情故にその考えが払拭出来ずにいる。

霧島が3組に入り、別れた後ため息が出た。あの桂城円莉に対して、私達は苦勞しか感じていない。このご時世にISのことを「女しか乗れないガラクタ」と公言するぐらい肝の据わった奴で、独自の倫理観や意見を持っている。齒に衣着せぬ物言い、敵は学園内にも居るのだが、彼女自身の教師としての能力は秀でていいる。学園長が直々にスカウトしたというのだから本当である。

実際私も見たが、今居る教師陣の誰よりも「教授すること」に秀でていて、化学に理解のない私でさえも理解出来るぐらいの才能の持ち主だ。しかし性格と言動が相まって好意の目で見られないのである。まるで昔の束が学園に居るかのように感じていて、とても疲れる。

しかしあの桂城円莉がなぜ……2人目の男性操縦者である霧島にあのようなことを言ったのだろうか。その点が気になる……いや気になる点は幾つもあるが、特にそこが分からない。発言はあれだが、個人授業を受けさせる目的で……そんな奴じゃなかったな。じゃあ一体何だというのだ？

「先輩。顔、顔。」

「ん、ああ。すまないな山田君。」

「やっぱり、桂城先生のことですか。」

「まあ、な。どうしても気になる。」

「私、あの先生苦手なんですよ。出会い頭に『胸揉ませろ』って、これセクハラ行為じゃないですか。」

「……山田君。」

「はい？」

「……私は彼氏いない歴24年と言われたぞ。」

「あつ……。」

そう、このようにグサグサと心に突き刺さる言葉を、言った本人はまるで気にしてないように発言するので、心に傷を付けられた同僚は多いのだ。酷い時は立ち直れなくなるまで発言して、拳句の果てに学園を辞めてしまった者まで居るのだ。これに対して学園への賠償は覚悟していたが、不思議なことに何も起こらなかったのだ。

そう考えながら職員室へ入り、桂城先生を探す。……居た、先に彼女の元に向かって頼まれていたことを話す。

「桂城先生、少し時間良いですか？」

「んおー？ 何だい上杉謙信。」

「毘沙門天の化身ではありません。」

「かったいこと言わないって。似たようなこと弟から言われたんでしょー？」

「……なぜ知っている。」

「聞こえてた。これでも地獄耳だからねえ。」

自分の耳たぶを摘んで、ニヤニヤしながら耳を動かす。……本当に人の怒りに触れるのが得意だな……しかし、ここは平成を装って本題に入らねば。

「……んん、少し聞きたいことが。」

「なにさ？」

「霧島影吉のことです。」

「ああ……あのお堅い優等生君ね、もしかして聞いた？」

「彼が私に相談をしまして。貴女の言動に対して不信感を抱いていました。」

「……それだけ？」

「え？ ええ……。」

「ふーん……他には？」

「いえ、何も。」

「……ふーむ。」

「あの……？」

「あ、もう良いや。早く授業の準備に入れれば？」

「え……っ、私はこれで。」

「ばあーい。」

3分前になっていたのか、早いな。いや話していたりすれば誰だつて時間の経ち方は早く感じるものか。にしても……彼女は一体何を考えていたんだ？

◇ ◇ ◇ ◇

5時間目の授業に入り、1組が化学の授業を行う。当然担当教師は

問題教師の桂城円莉であるが、そんなこと1組の、そして1年の者が知るわけが無い。化学の時間となり予鈴と同時に桂城は教室に入り、空気が陰険としているものにすぐさま気付いた。

（あらく、気持ち悪っ。空気が気持ち悪くてやってらんないなあ。ってか、国同士で喧嘩するんじゃないっての。）

授業を始める前に桂城は、窓を全て開けた。その行動に何の意味があるのか分からない1組の者は、突然の行動に驚く。

「あの〜……」

「ん？」

「なんで、窓を開けているんですか？」

おずおずとした様子で質問したのは、最初の男性操縦者である織斑一夏であった。彼は容姿や性格が良い為、イケメンでモテる。本人はそのことに対して自覚は無いが、自身の主夫力は認知している。簡単に言ってしまうえば、彼は「唐変木」なのだ。

しかし桂城は特に興味もなくどうでも良いような表情のまま彼に振り向いた。

「こっ、空気が気持ち悪かったんだよねえ。やっぱり喧嘩の後の雰囲気気って汚いのなんの。」

『!?!』

「ツ!?!……えつと?」

1組の人間は理解した、いや理解してしまっただけ!彼女が只者ではないことを!もしくは変人であることを!

桂城は教卓に向かい、面倒くさそうな表情で桂城節全開で喋っているのであった!

「つてかさあ、聞いてて思ったけど……普通素人を選ぶ？負けるのがオチでしょ。」

「っ！いい、いきなりなんd」

「はいストツプー、君は黙ってー。他も黙って聞きなさい。人が喋ってる時は黙って聞きましようって習わなかつたー？」

織斑一夏は歯を食いしばって言い留まる。それもそうだ、桂城円莉は相手をイラつかせるような動作を加えながら、イラつかせる口調で喋っているのだからっ！

「代表戦つてさあ、そもそも実力者を選んだ方が有利な訳よ。だってクラス対抗戦の景品がゲット出来る確率がグリーンと上がるからさあ。普通そう考えるよね？ね？でもお……」

物珍しいからって選ぶ？普通。その思考の時点で既に蟹味噌程度の脳みそしかないの？よくこの学園に入学できたね、見習いたくないけど。」

「っ！言わせておけば何を言っ！」

「だあーかあーらあー……」

立ち上がって抗議の意を見せた『篠ノ之箒』であったが、上体を反らした桂城はノールックで、篠ノ之箒の使用している机にチョークを当てたっ！そのことに気付いたのは、机から響く音と地面に落ちたチョーク、そして桂城の姿を見て確信したっ！コイツは只者ではないと、全員が気付いたっ！

体を戻した桂城は、まだまだと言わんばかりに続けていくのであった！

「黙れ、犯罪者の妹さん。」

「ッ…………！ お前エ！」

「ふっ。」

織斑一夏が怒りに任せて立ち上がったかと思えば、そのすぐ近く。具体的には彼の右頬にチョークが飛んで行った！風きり音が耳元近くでした瞬間、彼の中に一種の恐怖が芽生えた！

「事実を言ったところで何も変わらないでしょお？ 篠ノ之東は今や国家規模の犯罪者、ICPOやらFBIやらCIAやらが血眼になって捜しているのに未だに尻尾も掴めやしない。国が犯罪者つて決めただから、私も犯罪者つて呼んでるだけなんだがあ。」

「ツ……いぐつ…………！」

「まあ私からすればどうでも良いんだけどねえ。まあ、代表戦のことに戻すんだけどお…………おいその金コロネ髪。」

「ツ!? わ、私わたくしのことですか!？」

「それ以外にだあれが居るってーの? んー?」

桂城は持つてきていたノートパソコンを一番大きなホログラムボードに接続すると、何やらタイピングし文を作成し始めた。しかしその文に、1組の全員が驚いた！ そう！ それは『セシリア・オルコット』が言ったことを、1字1句間違えずに映し出しているのだ！

「つと、完成。はいこれお前が言ったことねえ。これね、国家会議もんだぜえ? よーくよく考えてみれば。ほら、冷静になった頭で読んでみなあ。あ、音読ね。」

「お、おんどく……?」

「言いながら読めってこと。ほらほらほらほら！」

「な、何故私がそんなことをしなければ！」

「うっわあ、貴族ともあろう人間がこんな簡単なこと出来ない!? プークスクスうっけるう〜！」

「ツツツツ！ 貴女ねえ！ 一体何なんですか!? そんなに人をコケにしたいのですか!?! それに、教師としての自覚はあるんですか!?!」

「は? 何を馬鹿なことを。微塵も無いし。」

「はあ!?!」

「んまあその金コロネ髪はあ」

「無視をするんじゃありませんわ!」

「今度はチヨーク投げられたい?」

「うぐつ……!」

「話し続けるぜえ。具体的に言えば全部日本に対して罵倒してることばっか、いんやあ島国同士の喧嘩ほど見ていて滑稽なの無いよなかなか。うん。」

「島国同士……? 日本と一緒に!」

「しかもお、さつきも言ったけど国家会議もんだからねえこれ。もしこれが国のお偉いさんにバレたら、お前は【ブルー・テイアーズ】を没収されて財産も没収され、路頭に迷うか体売って生活しなきゃなあ!」

「ツ——!」

オルコットの顔が青ざめた。奪われるということに彼女はとてつもないトラウマを抱えているため、先程の桂城の言葉で冷静に至ったのだ。そのような想像を鮮明に描いてしまったが故に、彼女の体は震えていた!

しかし桂城円莉にとって、そんなもの毛ほどの興味もない。何故ならば彼女はセシリア・オルコットでは無いからだ。人を思いやって優しい言葉を掛けましょうと、昔そんなこと学校の先生から言われた筈なのに、そんなものドブに糞として捨てたと謂わんばかりである!

桂城が1つ息を吐くと、1組から向けられる視線が一気に恐怖の対象へと変わった。それさえも受け流すかのように彼女は教鞭を取るのであった。

「んじゃ、化学始めるぞー。付いて来ない奴は成績落ちたところで、私は道に転がる野糞ぐらいにしか思わねえからあ。そこんところよろしく。」

彼女は何事も無かったかのように授業を始めた。

6時間目のIS関連の授業中ではあるものの、私はただ1人黙々とノートを取りつつあのチョークの様子について考えていた。あの担任が投げたチョークの破碎具合は、間違いなく人間には発揮できない力を乗せて投げられ壁に当たったものだ。つまり……あの桂城もそのような可能性があるということだ。

だがもしそうではなかった場合、あれは桂城本人の自力じりよくによるものだ。まああの体型でそこまでの力を乗せることはほぼ有り得ないだろうと思うが……無駄な思考だったな。ならば……私と似た、または同じ能力を持っている可能性がある。

投擲物が運動エネルギーを増幅しながら、より硬い物体に当たった場合は分かる通りだが、勿論その投擲物が壊れる。そのエネルギー量や効率にもよるが、あのチョークを例とした場合では少なくとも5階建てビルから投げ落とされたもの。その分の運動エネルギーがあるということだ。

……エネルギー、か。以前私の方に物が投げられていた際、ギリギリのところまで止めたのだったな。投げた当人は殺してはいない、ちよつと私との記憶を殺させてもらったよ。それぐらいの処理をしなければ目立つようなことは無いに等しいからな。

ふむ、全くどうでも良いことか。しかし奴がエネルギーに関係する能力者だとすればマードーズ・ハイで何とか凌げるが、まだ姿を見せるわけにはいかない。私がこの能力を持っていることは誰にも気付かせないようにしなければならぬのだから……。

「おい霧島。」

「——っ、はい。失礼しました。」

「……まあ良い。先程の説明で分からない部分はあるか?」

「そう……ですね。今のところは大丈夫です。」

「そうか。今は授業に集中しろ。」

「以後、気を付けます。」

確かに授業中に考えていたのは迂闊だった。しかも私に縁もゆかりも無いIS関連のだ。こうしななければ怪しまれるのも致し方ないが……チツ、厄介なことに巻き込まれた。私に平穩は無いことなど、あつてたまるものかつ。

……警戒せねば、織斑千冬。桂城円莉。コイツらには細心の注意をして乗り切らねば。織斑千冬はまるで思考が読み取られているかのように鋭い、迂闊に内面を出してしまえば危険視されかねない。桂城円莉……コイツは読めないのが真の恐ろしさだろう。

何れにせよ、この2人以外は特に警戒しなくとも構わないだろう。悪いが平穩に過ごすために利用してや——

「ピーンポーンポーンポーン——————」

……？何だ、このチャイム。というか知らせの合図。やけに長いな、

オ——————ン……………あーしんどっ、真似るの疲れるはやっぱ。」

貴様か……桂城円莉！

「————桂城イ！」

……織斑千冬も苦勞しているのか、あのアマ。

「放課後必ず来いよー霧島あ。来なかったらお前のあらぬ噂流すからなあ。」

「教師が生徒を脅すんじゃないツ！あのバカッ！」

————くそがあ！あのアマ、必ず仕返しをしてやる！私の平穩を

潰したのだ、それ相応の代償を払って貰わねばなあ！



放課後。足早に霧谷から聞いた道順の通りに化学準備室へと向かう。表情は殆ど崩れておらず、何の感情を抱いているのか誰でさえも全く分からない。今ある手荷物全てを持ってその部屋に向かっているのは、やはり担任の桂城円莉によるものであつたり……………。

階段を上り上って東の端にある化学準備室に向かった霧島影吉は、能力者であることを踏まえていることを忘れた状態で乗り込んだ。

「ただいま来まし——」

瞬間、反対側の廊下の壁に何かが当たり破裂した音が響いたッ！

後ろを振り向けばなんと、白のチョークらしきものが砕け散っているではないかッ！そして壁にも微妙に、ほんの僅かにだが、傷が付いていたのだ！

「ッ、これは——ッ!？」

瞬間、襟を掴まれたかと思いきやそのまま投げ飛ばされた！

「ぐおっ!？」

「つたく、待ちくたびれたぜ。」

デスクに背が当たり霧島の体に痛みが走った。苦痛の表情になっているにも関わらず、桂城は何処吹く風と謂わんばかりに興味が無いように思える。彼女は扉を閉め、鍵を掛けたあと霧島に近付いて顔を

掴み、自身の顔と向き合わせる。

「なあ、お前——」

「持ってたんだろ？ 変な能力を。」

瞬間、霧島にとてつもない悪寒が走ったッ！ 背筋どころか全身が凍りついて、目の前に居る彼女に対し「恐れ」を抱いたのだ！

「……………何の話ですか。」

「ま、とぼけるわな……………てえつと。」

彼女は霧島から離れた後、パークアのポケットからメモ用紙を取り出し内容を読み始めた。

「今年の2月10日、2人の女が死亡。そいつらは女権団体の輩で、お前がバイトしていた店でチンピラ紛いのことをしてかしたが、その後交通事故により死亡。……………だがドライブレコーダーに映っていた映像が、かなり妙なんだなこれが。」

「——私に、何故その話をするのでしょうか……………？」

「実はよ、警察の奴らとちよーつとした関係持ってたな。で、その知り合いに事故当時のことを教えてもらった訳よ。それが……………これ。」

桂城はまたパークアのポケットに手をつ突っ込むと、霧島に見せるように提示する。映っていたのはドライブレコーダーの映像の一部なのだが……………その女2人はおかしかつた。

「ほら、これ。どこがおかしいと思う？。」

「……………何処もおかしいようには。」

「いんやあ、おかしいんだなあこれが。ほら、コイツら。よく見てみるよ。」

「驚いてる素振りすら無いんだぜ？」

そう、この映像に映っている2人は何も驚いたような行動をしていないのだツ！ これらからどのようなことが分かるかと言えば――

「怖がってないんだよ。普通事故に合う瞬間位は恐怖に従って、それ相応の行動や表情が見える筈なのによお……これにはそれさえも映ってないんだよなあ。どう思うよこれ。」

「……被疑者は、車をかなりの速度で走行していたのでは？ ニュースにもありました。」

「そう、ニュースにもあった。だがなあ……車の当たった場所が場所であ。血は車の助手席のドアに付着してたんだわ。つーことは、確かにかなりの速度で走行していたが……被疑者は女2人に気付いて慌ててハンドルきったにも関わらず！ 女2人は恐怖の感情は無かった！ つまりは！――そもそも恐怖すら無い状態だったってことだ。」

「……では、何故それを私に？ 何か関係でも？」

「――まあだ、しらばつくれるってか。良いぜ、とことん突き詰めてやるからよオ。」

次にまたパーカーのポケットから出したのは、脳の断面図であった。それも3人分だ。

「1人は健常者の脳、あとの2人はさっきの女どもだ。……ここで気になる点があつてな、この2人と健常者を比べたら扁桃体に異常が出た。」

「扁桃体……？」

「お前なら知ってるだろうがよお、ここは脳内で感情を司る部分だ。だが外傷もなく扁桃体に細工することなんて普通なら不可能なんだわ……それ以外なら可能になるがよお。」

霧島は内心焦っていた。『コイツ、そこまで調べているのかッ!』と。故に感じていた、逃れられない必然や運命を!霧島は齡18という若さで、平穩が消え去る恐怖を味わってしまった!

「まあお前が仕出かしたことはたーくさんあるだろうが……コイツを見せれば手っ取り早いな。」

桂城が拳を作ると、霧島の目には有り得ないものが映っていた!

グローブだ!指ぬきグローブが何処からともなく現れ、桂城円莉の手に装着されていたのだ!そして霧島はそのグローブに気を取られていたことで、桂城が確信した。

「やーっぱり、見えてんだな。私のコイツが。」

「ッ——!」

「おお? 漸く動揺したなあ、その表情見て安心したぜえ。お前も人間なんだなって分かったからよお。」

不意に桂城はその指ぬきグローブのある手をパーカーのフードに突っ込む。そして取り出してきた……パチンコ玉だ。

「ついでに教えてやるよ! 私の能力は【エネルギーの増幅】! 何でも良い、運動エネルギーや位置エネルギーなんかでも良いし熱エネルギーや電気エネルギーでも良い! それが私の能力さ! 賢いお前なら分かるよなあ!」

「——成程。あのチョークの破碎具合は運動エネルギーを増幅させて投げた結果、ということか。」

「ん?……それが本来の口調みたいだな。」

霧島は徐に立ち上がる。もうこうなつては仕方が無い、私の平穩を見出す輩は即刻排除しなければならぬ。彼はそう思った。いや、そうすることしか考えられなかった！故に彼が取った行動は――

「私の名は霧島影吉、年齢18歳。」

「――んあ？」

「今年の8月に19になる。今はこのIS学園の生徒だ。」

「お前……？」

「趣味は数学の問題を解くこと。特技はこれといって無い。」

「いや、はっ……？」

「18だから、酒は飲まないし煙草も吸わない。朝はジョギングをし、夜は宿題と予復習を終わらせて寝る準備をするんだ。」

「……………」

「寝る前に適温のホットミルクを飲むと、赤ん坊のように熟睡できるんだ。それのおかげで毎朝6時半には起きていられる。」

「……何の、話しだ？」

「私の自己紹介ですよ。どうせこれから、貴女は始末されるのですから。最後のお別れにと思ひまして。」

「――へえ？　そこまで言うんだ。何々、打開策でもあんの？」

「いいや打開策ではない。」

貴女を殺す策があるということさ。」

そう言い放つたあと、霧島の右側に何やら紫がかつたモヤが現れた！　それはどんだん形を作っていく、最終的には不気味な人型となった！

シルクハットに黒のポンチョ、細長い体に囚人服を着用しており右手にはナイフを握っている。顔は白と黒の半分で、境目には縫い付けられた跡がある。そして目は大きなボタンとなっていた。

「これが私の能力、私の力そのものだ。」

今ここに、戦いの火蓋が切つて落とされた！

今日の前に居る霧島影吉の隣に、その人型が現れた……くはっ、こりやあ良い！ 私アタシみたい^にに体の一部に現れるもんよりか、確実に良い！ 射程距離の差なんぞどうにでもなるけどよお……霧島影吉イ！ やっぱお前は——！

「【スタンド使い】だったなあ！」

「……スタンド？」

「ま、名称は私が付けたからな。知らねえのも無理ねえわな。意味としてはStand・by・me、傍に現れることから名付けたのさ。」
「なるほど……私が見えているそれは、貴女のスタンドということか。そしてコイツは、私のスタンドと呼ばれば良いみたいだな。」

「そう……ま、こんな御託は良いんだわ。さっきお前は私を殺すとか言ってたからな、私は抵抗するぜ？」

「……無駄なことを。」

「無駄かどうかは——自分で決めるんなツ！」

「先手必勝！ 先ずは手に持っていたパチンコ玉1個を、私の能力で『運動エネルギー』を増幅させて投げるツ！ スピードガンで測れば時速170kmは出ているこの玉を、お前はどうか対処する!？」

「クッ！」

ほほお、ナイフで。しかも切っ先に当てるつつ結構な芸当までして止めやがった。中々のスピード、そしてエグい命中精度だな。アイツのスタンドのスペックは少し理解出来たぜ。まだまだ終わらねえがよお！ 今度は親指と人差し指以外の、指と指の間に片手で計15個！ 両手合わせりゃあ——！

「どう凌ぐ!? 計30発の拡散攻撃をよお！」

「チイツー！」

また運動エネルギーを増幅させて時速170 km の速度を出させて霧島に狙うぜツ！ さあ、コイツはどうするよ!?

「マーダース・ハイ！」

へえ、そのスタンドに名前を付けてるのか。しかもマーダース・ハイと……んお、こりやスゲエ。自分に当たるパチンコ玉だけ弾いて凌いだか。そりや重畳、判断力や空間認知能力に優れているたあ中々だ。今まで戦ってきたスタンド使いの中でも、こりやあ強敵だなあ。

「はあ……はあ………」

「ふくむう、さっきので疲れたってことは燃費性能はそこまで良い訳じゃねえみたいだな。何度も攻め続ければ、何時か弱点は出てくるってヤツか。ゴリ押しに弱いタイプかよ。」

「はあ……何とでも、言え。はあ………」

「いけねえなあ、弱点を出しちやあよお。」

当たり前といえは当たり前だ。どのような状況下でどのような相手であっても、自分の弱点を悟らせるような行為するのは、相手にマウント取れって言ってるようなモンだからなあ！

「——狙う奴が居るんでなあ！」

「グウツ！」

今度もパチンコ玉30発！ 但し片手ずつ、つまりは15発ずつ投げるツ！そしてショットガンのように様々な場所にばらまいているからよお、必然的に落とすしか——あん？

霧島のスタンドが同じように私のパチンコ玉を弾いた。……そう、弾いたと思っていた。けど、実際はそうじゃあねえのかもしれない。

もし単に弾いてるだけならよお、普通起こるべき事象が起きてねえんだ。

私が最初にやった1発目であろうパチンコ玉、それがまだ霧島の足元にあることが不自然なんだ。他のパチンコ玉はエネルギーの増幅によって壁や地面、拳句に薬品棚のガラスや換気用の窓に陥没していたりしているのに……何故あれだけ。

どうやら、能力が厄介なパターンみたいだな。だったら、こういう時は直接本人から聞くのが良いよなあ？

「おい霧島あ、ちよつと良いかあ？」

「はあ……はあ………何で、しょうか？」

「お前の足元にパチンコ玉が一個だけあるだろ。それ、私が最初に投げたヤツだと思っただけだよお……聞きたいことがあるんだわ。」

そう、本来そうあつてはならないことが起きている。いや、起きていた”というべきか。足元……どちらかと言えば股下に転がっている1個だけのパチンコ玉。そう、それだけだ。だがなあ……。

「なあんで、そのパチンコ玉はお前の股下に！　ただ1個あるんだよお!？」

弾いた場合、運動エネルギーはまだ生きてる！だからこそ股下なんて場所は叩き落とすぐらいしねえとそこまで行かねえにも関わらずだ！」

「……………」

「黙るかよお……んなら、吐くまでやってやらあ！」

「しいッ！」

「うおっ!？」

コイツ、スタンドを戻して柵を倒しやがったッ！ステンレス製キャスター付きだから簡単に倒せられるが……まあ危険物は置いてねえし、特に問題は無い！お前が何を考えようが、私には通用しねえよ！

「マーダース・ハイ！」

なっ!? 板を外して自分の視界を遮っただど!? そして何故スタンドをまた出して……つて、スタンドまで隠しやがった!? だが、運動エネルギーを最大限まで溜めた1発のパチンコ玉はステンレス板ごとお前を貫くッ!

「無駄なのは、貴女の方だ。」

なにっ……ッ!? な、なんだとお!? す、ステンレス板が、貫かれていないッ! それどころか玉が反射しているじゃあないかッ! くそっ、ここは避けるしかな——

『シィアアアアア!』

な、まぎ——

「グオオッ!」

が、顔面を狙いやがった! 躊躇無くコイツは弱点の多い顔面を狙ってやがる! だがあ……今ので分かった、このスタンドはそこまですりはない。ナイフが主な攻撃方法故に、スピードは速いがパワーが足りない! だが、的確に弱点を狙った分、痛みは感じるのも事実だ。こうなったら……あれを使ってやらあ!

「ッ!? こ、これは……ガラスか! 分厚いガラスが、この部屋を分断したのかッ!」

「へへへッ……コイツあ本来、別の用途で使うんだがよお。今はお前を閉じ込める檻になっちまったなあ!」

そう、これでこの部屋は分断されたッ！霧島の居る場所にはドアも窓もあるが、窓は鉄線が編み込まれた防弾仕様の特殊ガラス！ドアは指紋認証付き、何か細工した途端高圧電流が流れる特殊仕様！お前は完全に、ここに閉じこめられてんだよお！

「チィ……だが、私のスタンドはこんなガラスなんぞ」

「おおっと待ちなァッ！そんなこたアさせねえよッ！」

パチンコ玉二十数個を、片手で鷲掴みして投げるッ！壁がある？——それが甘いんだよオ！

「ッ！ マーダース・ハイ、パチンコ玉を落とせ！」

「もう遅せえ！」

パチンコ玉が壁に当たる。その瞬間！パチンコ玉の当たった場所から何かが霧島の体に直撃し、またデスクまで吹っ飛ばされていった！

「グオオッ!?!」

（こ、これは何だッ?! 何か見えない力に、私は吹っ飛ばされた！あの女のスタンド能力で起こったのは確かだろうが、何のエネルギーを増幅させた!?!）

デスクに手をかけて立ち上がろうとするが、それを許しはしないと桂城はまたガラスに向かってパチンコ玉を投げた！それによりまた、霧島は吹っ飛ばされることになった！だがデスクと衝突し、今度はデスクの上に乗った。

「ハグア!?!」

「さあて……これで後は、お前が降参するか気を失うかだ！ここは私の独壇場、お前はこれを解けずに……終わるんだよお！」

(ぐ……くそつ………アイツの能力は分かる。だが、何のエネルギーを増幅させたのかが分からないッ！それが何なのか、探らなければ私に正気は無い！)

「お前、ここからどうやって切り抜けるか考えてるなあ？ 普通の思考なら、そう考える。そのためにはさっきのエネルギーの正体を探らなきゃならない。……違うか？」

「ッ——！」

「じゃあよお……どっちが早いかな勝負するかあ？ お前が秘密を暴くか、私が終わらせるかをよお！」

まだまだパチンコ玉を投げ付ける桂城！そして霧島は延々とそのエネルギーによって身動きすら取れない！ 霧島は、このエネルギーの正体に思考を巡らせた！

(運動エネルギーではない。位置エネルギーでもない。ましてや光や熱でもない！思いつくエネルギーで残るは、音エネルギーの……み………音エネルギー。待て、音エネルギーだと？ 音で私の体を吹っ飛ばせられるのか？ 何か、何か見落としてる筈だ！ そもそも音は——ッ！ そ、そういうことか！ 音はそこまで重要じゃあないッ！ 本当に重要なのは——)

「——つくつくつく。」

「あ？ 何笑ってやがる？」

「そうか、そうだったのか。分かったぞ、この力の正体が！」

そう言った途端、桂城の行動が止まる！ 霧島の顔を見て、何か興味深そうな表情を浮かべていた！

「へえ……じゃあ言ってみろ。答え合わせしてやるからよお。」

「貴女が増幅しているのは『音』だ。だが、重要なのはそこじゃあない。音は空気を振動させて伝わる……つまり、貴女が増幅しているのは『空気の振動』だ！ 振動のエネルギーを増幅させているッ！」

その増幅された振動波が、私を吹っ飛ばした！　ここまでなあ！」

桂城円莉はその場で——拍手した。

「大当たりいー！　そうさ、振動さ！　振動のエネルギーを増幅させていたのさあ！」

「けどよお！　お前は既に対処出来ねえんだよなあ！　何せここまです離れているツ！　射程距離もそこまでねえんだろお!?　どうやっただって——」

「私はやれる、必ず貴女を倒す。いいや、貴女はもう倒されることが決まった。」

桂城は内心、この言葉に凄みを感じた！　この霧島影吉という男の信念と、言葉の重みを！　やると言ったら必ずやり遂げるという何かが見えた気がしたツ！

「そんだけ言うならよお……………やってみろおツ！」

「マーダーズ・ハイ！」

霧島のマーダーズ・ハイが、ガラスに向けてナイフを投げ付けた！　同時に桂城は50発のパチンコ玉をガラスに向けて投げ付けた！　だが、運動エネルギーが増幅された桂城のパチンコ玉が先に当たりまた振動波が起こった！

しかし！　ナイフはその振動波の影響を受けていないかのようには、ガラスへと刺さった！　そして振動波は霧島を……………吹っ飛ばさなかった！

「な、なにい!?　ナ、ナイフが……………さつき振動波を直撃した筈なのに！　なぜ落ちていない!?　それに！」

「それに、なぜお前は吹っ飛んでない……………か？」

「ツ!?!」

「ちようど良い。貴女も自身の能力を言ったんだ、私も言わなければフェアじゃあないよなあ？」

「どの口が言ってるんだか。」

「貴女に言われたくない。」

霧島はマールダース・ハイの隣に立ち、そのマールダース・ハイはガラスに突き刺さっているナイフを掴むと、そのまま下に切り裂く。するとあろうことか、ガラスの壁がナイフの刺さった場所から亀裂が入り崩壊していった！

「マールダース・ハイの特殊能力は——【殺す】ことだ。」

「殺す——それがお前の能力か。」

「ええ。」

「……だがよお、その能力ってのはガラスでさえも殺せるのかあ？

え？　　〃殺す〃　つつう言葉の意味ぐらいは知ってんだろお？」

やはりというか、その質問は来るか。そもそもマールダース・ハイのこの能力は、私がそう呼んでいるだけだからな。実際能力の制約がある時点で〃何でも〃だとか〃全てに対して〃等と言えない能力で、その上殺すという言葉を使っているのだからな。

「ええ、勿論のこと理解していますよ。」

「じゃあよお……どおやってガラスを破壊した？　えッ？　あの約30cmの厚さを持つ強化ガラスをよお？　それに、あの振動波をどおやって殺したあ？」

「先ずマールダース・ハイの能力は、細かく言えば物体の持つ性質や機能を消滅させるものです。〃殺す能力〃というのは、私がそう言っているだけと認識してくださいされば。」

「物体の性質と機能の消滅………なあるほど。パチンコ玉は運動エネルギーを殺して止めて、ガラスは強度を殺したのか。」

「大方、その解釈で合っています。」

「……んじゃあ、あの女2人を殺したのは——」

「私は関係ありませんよ。被疑者は交通事故を起こした本人なんですから………まあ、事実を貴女が誰かに伝える前に殺すまでですが。」

「いんやあ………伝えねえよお。つてか、流石に私も疲れた。あ、殺すなよ。」

ん？　　妙な反応だな………〃殺すな〃という言葉に迫力の欠片も無い。まるで何か諦めたような表情、かつ。ふうッ………！　く、くそッ。マールダース・ハイを使いすぎたみたいだ、あまり長く出すことに関し

ては解決しないな。

「お前も限界だろ？ 私も戦意ねえからよお、休戦しようぜ。もお、面倒くさくなってきたわ。さっさと本題に入りてえし。」

「本題だと？」

「……まあ、それはお前の部屋に着いたらで良いか。おい霧島あ、お前の部屋まで運べえ。道教えつからよお。」

「……予想はしていましたが、私とて疲れているんですけど？」

「男がそんなウダウダ言ってるじゃねえ、ほら運べ。」

くそっ……何で私がこんな酷い目に遭わなければならなかったのだッ……!? 私の平穏な生活が、早々に崩れてしまったでは無いかッ！ だが、今焦って殺してしまえば後々疑われる可能性とて出てくる。ならば機会を見て殺すしか無いな。

「鍵ならあるぜえ。あ、176号室だかん霧島あ。」

チィ……一々五月蠅いんだよ全く。



ふう……遅いわねえ、2人目の彼。もう18時半に近付こうとしてるし……まさか迷った、訳じゃないわよねえ。傍から見て分からないことがあれば人に聞くタイプみたいだったけど……彼女の用件がまだ済んでないのかしら。まあ、あの桂城田莉だしねえ。こっちの動きを完全に制限させてる辺り、相当なコネクションの持ち主なのは確定してるけど……そのコネクションが分からないって、一体どうしたところかしら。

あら、鍵開いたわね。ちょうど良いわね、ご挨拶として少しは友好

関係を築いてもらえるように水着の上にエプロン着せて、裸エプロンに見えるようにしてみたけど……どんな反応するのかしら？

「おかえりなさ……い……」

「……………」

「……………」

——な、なな……！ 何で彼女が居るのよおツ!? 彼だけかと思つたら、桂城円莉まで居るってどういうことよツ!? しかも何か2人もボロボロだし！ 何か2人目の彼は疲れてるみたいだし！

「……コイツ誰だ。」

「痴女に決まつてんだろ。エロ猿共が見てるようなエロ本で知識集めてんだぜ？ 紛れもなく痴女じゃねえか。」

「ちよツ——！ 私痴女じゃ」

「あー退け退け、今は teme に構ってる暇なんざねえんだよ私達。担任と生徒のだーいじなお話があるんだからよ、邪魔すんじゃないよ売国奴。」

「ばッ、ばば売国奴じゃないわよッ！」

「いーからさっさと出てけ。コイツがマジギレしたら厄介なのはお前の方だろおがよお。」

「ッ！」

彼、霧島影吉の顔を見る。あまり変わってないように見えるけど、冷ややかで蔑んだ目からはゴミを見るかのような印象を与えているのだとすぐに分かった。流石に不味い、でも部屋に来てから仕掛けていた盗聴器と小型カメラが見つければもつと不味いわ。下手にその存在を認識させないように、いつもの飄々とした態度を取ってその場を退散するしか無いわね。

「……ええ、分かりました。では、私はこれで。」

「おう、二度と来んな。」

ツ〜！ あ、あのロリババアめえ〜ツ！ 接触するチャンスが台無しになったじゃないのよおツ！でもまあ、監視するだけの機材は揃ってる。あとは何者かへの対策による監視を3年間行えば良いだけ、場合によっては【更識】の力を使えば——うん？ 虚から着信来たわね。

「虚ちゃん、どうかした？」

「……お嬢様、ご報告です。先程仕掛けられた盗聴器と監視カメラの機能が全てダウンしました。」

「……はっ？」

いやいやいや！ 誰にもバレないように注意しにくい場所に仕掛けたっていうのに!!

「桂城が場所の特定を行い、彼が回収していました。その場で破壊された上に、また設置される警戒まで……。正直、桂城円莉を舐めていました。」

「……ええ、そうね。」

桂城円莉……本当に彼女は分からない。プロフィールが不明で探れない上に、彼女は私のことをよく知っている。私が暗部組織の頭領という立ち位置に居ることや、私の行動パターンまでも。正直言って、どれ程の権威を持っているのかは定かでない。上からは何も知らされていない分、余計に知りたくなるわねえ。

にしても、彼女が彼に何の用事なのかしら。いくら何でもお互い初対面に近い間柄で、彼の部屋に入っていくのはどうかと思うわ。生徒と教師……うう、そのシチュエーションが脳裏に浮かぶう。



「つえーいっと！ あーつーかれたッ！」

実際に監視カメラと盗聴器を外して破壊したのは私なんだがな。だがその場所が分かったのは驚きだ、エネルギーの増幅が能力であるのにこのような探知能力も備わっていたのか？ まあそれはどうでも良いか。今聞くべきことは幾つかある、コイツが私の住む部屋に来たのもそのためだろう。

桂城はベランダ近くのベッドに、私は荷物が置かれた近くのベッドで休む。だがさっさと終わらせて帰らせる、私の生活に監視は要らないものなのでな。

「……幾つかお聞きしたいことがあります。」

「んー？ なんでえい？」

「先程の痴女は、一体誰です？」

「あーアイツ？ んー……分かりやすく言ったら、FBIみたいな役職の奴だな。まあその頭領なんだわ。」

FBI？ 前に日本にはFBIしか存在しないという情報を見たことがあるが、そのFBIの総まとめ役が一体なんのようなんだ？

「FBI……ですか。」

「もうちつと面倒くさくいえば、対暗部用暗部組織。でもFBIの方が分かりやすいだろ。」

「……で？ スパイなどの国際的犯罪者を捕らえる組織が、なぜ私を監視していた？」

「そりやお前、貴重な男性操縦者だぜ？ 何かあった時の為の保険みてえなもんさ。ま、何かあった時に駆け付けるのは遅せえけどよ。」

「——次に」

「あーそれについちやあ話すわ。ま、答えは決まってるだろおがよ。」

敢えて言うなら……お前はこの問いにYESしか答えねえだろおな。」

「なに……?」

私が……肯定しなければならぬ問いだど? どうせ碌でもない問いなんだろうが、私は平穩に暮らさねばならないのだ。どんな問いだろうと、NOと答えてやる……!」

「さてっと……ちやつちやと進めるか。私の所属と、国籍から言つてくぞ。」

「改めて、私は桂城円莉。国連所属の自由国籍、超能力対策機関のモンだ。ほれ証拠。」

国連……自由国籍だと……!?! そしてパーカーのポケットから……あのポケットにどれだけ入っているのだ? いや、そんなことはどうだって良い。超能力対策機関……というとはやはり。」

「私のようなスタンド使い、がターゲットという訳か。」

「んまあな、主にスタンド使いの保護か始末を担つてる機関……だな。お前は私の権限で保護対象にするがよ。」

「……その保護対象に入らない、と言えはようになる?」

「無理矢理にでも始末。場合によつちやあ各国がお前を国際指名手配にしてお陀仏……な? YESしかねえだろ、これ。その代わり保護対象になれば、条件付きだがお前の平穩な生活とやらを保証してやるよ。」

「——その条件とは?」

「私達と同じ機関、国籍への所属。そして機関からの依頼を受諾しなければならぬ。主は同じ奴ら見つけて保護するか始末するかのどっちかだな。完了すれば報酬はたんまりと貰えるぜ。」

成程……確かに保護対象となれば私へのメリットは大きい。その

対象になれなかった場合のデメリットも大きすぎるものの、依頼内容に統一性が確認されている分安心は多少出来る方か。だからといって危険が伴わない訳では無い。……だが、ここは大人しく従って所属した方が良いだろう。世界的に保護を受けるのならば、平穏な生活は保証される。

「——条件が条件ですが、入りましょう。私に対するメリットが大きいのでね。」

「話の分かる奴は好きだぜ。」

「……このIS学園にも、誰か?」

「スタンド使いは今んところ私とお前だけだ。んまあ、協力者は居るがよ。それについてはまた明日にでも。」

そう言っつて桂城は部屋から出て行つた……。にしても、今日は疲れた。もう腹が減つてるとか体を洗ってないとか非常にどうでも良くなつてくる。少し仮眠程度に済ませておいた方が良いのかもしれないがな。

翌朝

——結局朝まで寝てしまったのか……ッ。そのまま制服で寝てしまったので皺が入っているじゃあないか。アイロンをかけなければ。そして腹も減っているときた……恐らく購買よりも食堂で腹を満たさなければならぬ時みたいだ。あまり目立ちたくないの、購買で済ませようとするのは面倒過ぎる。朝は和食派である分、選択するのにも時間は掛からない食堂が今はベストか。

……ふうッ、さっぱりした。昨日の汗や疲労が溜まった状態で向かうなんてのは嫌だ、こればかりは面倒であつてもやらなければならぬ。

それはそうと、この学園に世界規模の機関所属人物が居るとは思っていないかつた。しかもお仲間も居るときた。そして桂城円莉の『試験』のような事柄を経て、私もその機関の所属が決定し国連からの援助を受けることが出来たという、普段よりも濃密過ぎる昨日が起きた。……こうしてみると少し分かりづらくなってくるが、とにかく私は今のところ平穏な生活が出来るとみたいだ。

そろそろ食堂へと行くか。制服で向かい、次に部屋に戻って歯を磨きまた教室へと行くのか……面倒かもしれないが、何かあつた時のために落ち着かせるように部屋へ戻っていく方が良いかと考えた結果だ。流石に人混みの多い場所はどうしても苦手になるのな。



織斑一夏、年齢16歳。世界初の男性操縦者にして、あのブリュンヒルデの弟。ネタ的にはこっちの方が話題性も強いし、彼女らしき生徒が居るから色々ネタ切れには困らないでしょうけど……私的にはもう1人が気になってるのよねえ。

霧島影吉、年齢18歳。発見された2人目の男性操縦者なんだけど……そのあとの出来事での話題性は一時期世界規模のニュースになつてたのをよく覚えてるわ。何せ、彼がISから降りた途端にそのISの機能が停止したんだし。これはもう取材するしか無いっしょッ！ って思つて食堂で張り込みしていたんだけど……一向に来ないわね。

購買で買つて済ませてるのかしら。いやいや、流石に入学したばかりなのに購買の場所を知ってるのは無いか。流石にずっと張り込みするのは疲れるし、私も朝ごはん食べようか。

「ご飯大盛りにするかい？」

「いえ、食べ切れないので大丈夫です。」

ん？ 今の声は……聞き慣れない男の声、ということとはッ！ やつぱり居たア！ 張り込んで良かったあッ！ 報われたのねえ！ あ、受け取つてから向かったのは……ここから見て右端の席！ いやっしや取材開始！

「君、ちよつと良いかな？」

「……………」

「あー、先に自己紹介ね。うん。私は黛薫子、2年で新聞部の部長をしてるのよ。今日は君に取材しに来たのよ、噂の霧島君にね！」

「……………」

な、何よ。何の反応も無いじゃないのよ……！ というかずつと食べてるし、気付いてないの？ いやいやそれは無い。私そこまで影薄くないしコミュ障でしどろもどろになる陰キャじゃないし、存在感はあるし！

「え、えーつと。取材をさせても」

「感情が人に与える影響とは、興味深いと思う。」

……えっ？ な、なに急に。そんな電波系だったのこの2人目。さ、流石にここは付いていけないけど……ここで諦めたら新聞部部长としての問題以前に、記者としての務めが果たせられないじゃないの！ ここは根気よく粘るしかない！

「そ、そうですねー。」

「『飯が不味くなる』という言葉がある。確かに時間が経てばその料理本来の味は消えて不味くなるのも事実だ。

しかし、嫌悪感を持つ状態での食事の不味い。何故かは知らないが感情は五感に作用し異常を与えることで危機察知をするようだ。」

「は、はあ……。」

「……要するにだ。」

最後にご飯を食べて完食し終えたその彼は、1つ息を吐いて私に向かってこう言った。

「食事の時ぐらい邪魔をしないでくれますかね？ 誰であろうと食べ物への恨みは恐ろしいものです、当然不味くさせた方に対する恨みも恐ろしいものです。もう2度と近付かないでくれますか？ 不快で食事が不味くなるので。」

「んなッ………!!？」

ま、マジか……ッ！ 電波系かと思ったら意外に現実味のある人だった！ というか不快って、女子に不快って言葉は厳禁なのに!？」

「おおう、霧島あ。」

「チッ。」

「うえ!? か、桂城先生!? それに——若草アツ!？」

「おおう、文屋か。まあ来るのは分かってたけどよお、もうちつと頭使えよ。そんなんじやあマジモンの記者なんぞ夢のまた夢だぜえ?」

「お、大きなお世話です！　　つてか、何で桂城先生は2人連れてきてるんですか!?!」

「その霧島に用があんだよ。わーったらそこ退け、あと退散しとけ。まーたチクって予算削減するぞ?」

教師が脅している！　でも無視したら本当にしてきたからここは逃げなければツ！　いつか必ず霧島君には取材させてもらうわよ！



桂城茉莉の言葉でそそくさと逃げて行った黛とやらを他所に、発言した当人は私の隣に座り、他の連れの2人は向かい合わせに座る。私の前には作業服を着た男が、桂城茉莉の前には若草という名の女子が座った。

「昨日言ってたろ、私の協力者だ。」

「ああ……あの時のか。」

だが1つ気になることがある。そう、私でさえも疑問に思ったことだ。

「なぜ男がここに居る?」

「そっちか。コイツ、『南方みなかた 葵あおい』は整備科でな。ISに乗れなくても、

大まかな仕組みとか機体の点検する奴は必要になってくるからなあ。

コイツはそのためにこの学園に居るんだよ。」

「紹介に預かった、南方 葵だ。こっちは――」

「部長が言ってた。『若草 琉璃るり』……宜しく。」

「……霧島影吉だ、知っているだろうが。」

男、南方の方は少し独特な喋り方だな。〃厳格そうな〃雰囲気がある。女、若草は見た感じ暗いな。長髪で前が殆ど隠れていて、眼鏡越しの片目しか見えない。しかし、この桂城が協力者というのだから実力は本物なのだろう。

「先ずは南方から。コイツは物作りに関してはお墨付きだ。腕前が良いで、コイツの発明品には役立って貰ってるんだぜ。」

「材料さえ揃えれば何でも作る。それぐらいが取り柄がな。」

「セクサロイドを作って依頼主と契約したのは誰だったか？」

こ、コイツ……！ そんなものまで作っているのかッ!? しかも契約主が居るとは……そこまで高性能な物を作っている人間が居るとはッ……！

「次に若草、んまあ見ての通り陰キヤだけだよ。」

「陰キヤは余計よ。」

「まあまあ。コイツは情報収集に長けてる奴でな、幾つかサイトを建ててリアルタイム並の情報を操作できる。しかも……ほれ、見てみる。」

桂城から渡されてきたものは……雑誌? しかし、これは3年前のものか。しかも付箋が貼られている。そこを見ろということか。

開いてみれば、大物政治家と有名女優のスキャンダル記事が大々的に掲載されている。この記事がどうしたというのだ?

「その記事の写真な、この若草が撮ったんだよ。」

「なに……?」

「機材は南方がやってくれたが、その撮影技術やらは若草の専売特許ってヤツだな。ま、【ダーティーワーカー】としてのコイツらを私達は買ってるのさ。」

ダーティーワーカー……成程、何となく分かるぞ。金稼ぎの為にそのようなスキャンダル情報を収集し、出版社へその情報を送り指定金額を振り込ませる。かなりの腕前であり、その類の仕事の危険性をよく知っているのか。

「後は……また放課後にでも来い。予定的にそっちの方が合うからな。」

「他にも居るのか？」

「まあ、な。けど、ここまでにしとこうぜ。そろそろ面倒いのが来るからな。」

その言葉通りに、凜とした声が食堂中に響いた。織斑千冬か……成程、確かに桂城よりかはマシだが面倒な輩だ。部屋には戻れそうにないとなると、うがいだけでもしておこう。



そして放課後へと時間は進んでいく。その放課後の時間、若草は新聞部で1人パソコンで何かを調べている……のではなく、ブログを見ていた。しかしこの部活内で他人の目を欺きながら暇つぶしのような行動は慎むのが一般的である。

だが、これもまた超能力対策機関からの依頼でもあるのだ。スタンダード使いと思わしき人物の特定や絞り込み、果てにはGPSや発信機などを使用したオペレーターとしての役割を担っているのが彼女だ。

機関からの報酬は、ダーティーワーカーとして動いていた時の10倍20倍は良い。依頼の完遂を行うだけでかなりの金額が動くのだから、普通ならば以前やっていたことは止める筈だ。

しかし、未だに彼女はダーティーワーカーとして動き続けていたりする。機関からの依頼が主な収入源とすれば、このダーティーワー

カーは副業といったものとして。スキヤンダル記事の写真を出版社へ送り金をせびる。

汚い手は幾度となく使った。その気になればキャバ嬢や娼婦に成りすまして情報をスムーズに入手していたことだつてある。そのような経験をしているからこそ、同じ部活の長である黛薫子に対して“甘い”という認識を持っていた。

彼女は正攻法で、取材相手の情報を手に入れようとする。それは記者としては正しい、ダーティーワーカーのような行動は1種の“騙し討ち”である為に記者とは呼べはしない。だが、その彼女は闇を知らなすぎる。

親が出版社へ勤務しているから、自分も似たような道へと走るのは結構。ある意味普通の選択である。だが、その選択にも決めた責任が重要視されてくる。その道を選んだのならば、酸いも甘いも体験しなければならぬという覚悟を持たなければ、この世界で生きていけないことを覚えておかなければならない。

そのような考えを持つ若草のPCの画面内に、新たな書き込みが加えられた。しかし内容から関してどうでも良いことのようにだ。クソの役にも立たない。

(――まあた、スキヤンダルでも探ろうかな。)